

Fate/Grand Order~荒寥
魔星大陸 梁山泊~

葵尋人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

新宿のアサシンの幕間を待てなかつたからか、こんなものが出来ていた。

反省している。

直ぐに終わると思います。

全体の長さ的にはアーチャーインフェルノ幕間Ⅱ節分イベントくらいではないかと。

目次

プロローグ	1
第一話 十の太陽	15
第二話 時雨は濁った色をしていた	28
第三話 麒麟	43
第四話 境界の猫	56
第五話 千山万水語るに及ばず	69
エピソード and トレーラー	80

プロローグ

「胎児よ、胎児よ。何故、躍る?」

少年の耳に届いたその詩(うた)は真冬の湖のような酷く凜とした女の声で紡がれていた。

「母親の心がわかつて恐ろしいのか?」

永劫を生きてあらゆるものを見た老人のようにも、何も知らぬ少女のようにも聞こえる不思議な響きであった。

一体、この詩は、この声は何なのか?

そう思った所で少年は気付く。

何も見えないということに。否、見えないのではなく見えているものが黒という色だけであるのだ。

「——彼は私が怖いから私の胎(はら)の中に居ないのだろうか? 少年はどう思う?」

自分の見えているものが『夢』であることに漸く至れた少年の前に齎された問いは、間いというにはあまりにも輪郭がぼやけたものであった。

「分からない。アナタが生んだからアナタのお腹の中にいないんじゃないんですか?」

当然、莫とした問いには、莫とした答えしか生まれない。

「違う。そもそも彼を生んだのは、私じゃあない」

そして、女の言葉は、少年の曖昧模糊とした回答どころか自らの問いの根幹すら否定する言葉であった。

「否、私の技という母体があつて、私の教えという胎内で育て、私の好みという栄養で調整したのだから。あれは私の子なのだろう。私が、産んだ」

屁理屈だと、少年は思った。

「彼」が女の生んだ子供でないなら、そもそも胎にあつたという過去がない。

何故いなのかではなく、いないことが当然であるのだ。

そこを疑問に感じるの方が狂っている。

そう思った瞬間であつた。

「だが、そんなことは関係ない」

少年の首に女の手が掛つた。

ボクシングのバンテージのような布が巻かれた腕は細いながらも、女とは思えないほど筋張っているのを、脳幹から生まれる熱と酩酊感の中でも少年は確認する。

「兎に角、私は、あの子を孕みたい」

女の荒い呼吸が少年の顔に掛る。

併し、そこまで近い場所にあるのに女の顔貌は分からない。

一体どんな顔でこんなことを言っているのか、少年には分からない。

笑っているのか、泣いているのか、蕩けているのか。

ただ――

「だから、あの子を返して貰うぞ。藤丸立花」

屹度、これは怒りを湛えて言っているのだろうと少年は想像した。

†

立花は目を覚ますと激しく上体を起こす。

「最悪の目覚めだ……」

過呼吸交じりにそう独り言つと、頭が割れるような鈍痛と、息苦しさを自覚する。

ふと、立花はベッドの傍に置かれた姿見に目を向ける。そこに映っていた特徴と言え
るものが存在しない極平均的な十代の東洋人らしい顔に、恐怖の色が浮かんでいた。

これまでおかしな夢を見ることは――英霊の夢の世界に触れる事は幾度となくあつ
た筈だ。その中で死ぬかもしれないと思うこともあつた。

例えば下総国である。一人の剣士と立ち向かったその夢は、夢と言うよりも一つの独
立した世界であり、多くの死に触れ、自らも死ぬような目に遭つた。

それでも先程の夢は気持ち悪いと感じたのだ。

女の言動がではない。

このカルデアには様々なサーヴァントがいる。気が触れた者もいれば、話が通じない者、人とは相いれない価値観を持つ文字通りの怪物もいる。

それと何の違いがあるうか。

無論、カルデアと敵対する側に——詰りは藤丸立花が生きていく世界を、ロマニ・アーキマンが救った藤丸立花が生きなければならぬ世界を壊す立場にあるのなら敵対もするだろう。

併し、それだけだ。その価値観を否定しようとは思わない。

だのに、夢に出てきた女を藤丸立花は気持ち悪いと思つた。その理由は何なのだろうか？

それを考えていると、部屋の自動ドアがウィーン……という音と共に開いた。

「よお、マスター。今日も爽やかなお目覚めかい？」

悪童めいた軽い調子の声に反応し、立花はそちらを向いた。

そこにいたのは、刺青に覆われた筋肉質な体を惜しげもなく曝す伊達男——アサシンのサーヴァント燕青であった。

「……つと、どうにもそうじゃないっばいな。如何した、如何した？ 悪い夢でも見たのかね？」

燕青は契約者である立花の顔色が蒼褪めているのを見て取って、彼の傍に寄った。

「悪かったかどうかは分からない……。でも、夢を見たのは確かかな？」

「ほう。ちなみにどんな夢よ？　後輩ちゃんに面と向かって大嫌いとも言われたかね？」

「それはそれでサイアクだけど……。でもそういうのじゃない。もつと訳が分からなくて、でも良くないことは確かな夢だった」

「具体的には？」

「女の人が、訳の分からないことを聞いてきた」

立花は先程の夢の中の女の問い掛けの内容を事細かに再生した。

「……何それ、キモッ！　てか、地雷臭ハンパねえな、その女」

燕青はあからさまに、身震いするような仕草を試みせる。

「てか、その夢大丈夫なのかよ？　全く信頼出来ねえし、頼りたくもねえが、マーリンのヤツに相談してみるか？　ほら、餅は餅屋っていうし」

円卓の騎士の相談役、世界有数のキングメーカーとして知られる花の魔術師は夢魔と人間との間に生まれた混血児である。

その特異な生まれの為にマーリンは他者の夢に介入するという能力を持っている。

故に、夢が関わる事象であれば彼ほどの専門家はいないと行って良いだろう。

だが、問題は彼の人格である。藤丸立花が知るマーリンは悪戯好きでトラブルメーカー、その上人が悪い。

困難な状況になりかねない場合であっても敢えて見逃す可能性だってある。

「……まずはダ・ヴィンチちゃんにしようよ」

そう提案しながら立花は漸くベッドから立ち上がった。

正直、立花にとってマーリンは出来れば大人しくしていて欲しいサーヴァントの筆頭であった。

こういった事態にあつては、面白がつて何をするか分かつたものではない。

故に最初に相談すべきは万能の天才として謳われ、カルデアの所長代行に収まっているサーヴァントキャスター「レオナルド・ダ・ヴィンチ」であろう。

「その方がまだマシか。まあ、あの姐さんも何だかんだ問題児だが……」

億劫そうに項を掻きながら燕青も立花に続き立ち上がる。

「ま、それでもあのお花畑野郎よりはマシか。よし、まず工房に行ってみるか」

「そうだね」

コツコツと二つの足音がカルデアの廊下に響く。

「そういえば、燕青はなんで俺の所に来たの？」

「ん？ ああつと……俺も夢を見たんだよ。それでまあ、胸騒ぎがしてな」

「夢？ まさか、俺と同じ……」

「残念ながら出てきたのは女じゃなくて男だったかな」

そう答える燕青の後に、

「それはひよつとして盧俊義ではなかったか？」

と女の声が続いた。

立花はその声に目を見開いた。夢と同じ声であったから。

驚愕に立ち尽くす立花と、困惑する燕青の肩に女の腕が回った。

「やあ、藤丸立花。さつきはどうも」

女は立花の方を向いて微笑みかける。

立花の目に映ったのはその声色以上に、背筋が凍るような美貌であった。烏の塗れ羽のような艶やかな髪を俗に言うおかつぱ頭になっている。ロマニと同じくらいの年齢に見える女には一件不釣り合いに感じるが、立花は不思議と違和感を抱かなかつた。瞳は一切の光を感じさせないほど真っ黒で、唇が青く、それだけでも特異な見目と言わざるを得ないのに、極めつけるように頭には猫と思わしき耳が生えていた。

総じて胡乱と言わざるを得ない女である。

「——そして、久ぶりだね、燕青」

そして奇天烈に過ぎる美女はどうも燕青の知り合いであるようだったので、藤丸立花

は目で以て彼に訊ねる。

“この人誰？”

と——。

すると燕青は叫んだ。

「誰だテメエは！」

と。

自分の背後に立つ女に肘鉄を放ちながら。

女はそれを躲し、翻って二人の前に立った。

そして、まず二人は思った。

“デカイ”と——。

カルデアの女性サーヴァントの中でも背が高いケツアルコアトルと並んだ場合、屹度目の前の女の鼻がケツアルコアトルの額の辺りに来るだろう。

そして、下世話な話、女性的な意味合いでもそれは巨大であった。

黒い飾り気のない着流し姿であるが、いつ

「酷いじゃないか。久しぶりの再会だというのに」

「何度でも言うがね。テメエは誰だ？ 俺には良い歳して猫耳付けるような恥ずかしい

知り合いはいねえんだよ」

女は本気で申し訳なさそうな顔をして、

「——嗚呼、濟まない。混ぜられたものの影響だね。どのような姿に調整してもこれが生えてきてしまうのだよ」

と耳を触りながら言った。

「そして、もう一つ謝りたい。この姿を君に見せるのはこれが初めてだった。故に、改めて——初めまして、燕青」

「どういう意味だ？」

「私が君の心に指を入れていた唯一人であったということだ。お前がお前である限り、必ず私に至ることが出来る。私とは詰りそういう存在だということだ」

そう語る女に燕青は、

「勿体ぶった言い回しで……」

強く齒齧みし、

「煙に巻こうとするんじゃねえ！」

女に飛び蹴りを仕掛けた。

併し、燕青の蹴りは女を捉える事はなかった。蹴りは女に直撃したかに見えたが、女の姿は霧散し、廊下の壁に凭れる形で今度は立花の傍に現れた。

「詩的と言ってくれ。それに伝わるように話さないというワケではないさ」

そう言つて再び現れた姿さえ消え、今度は二人の遙か後ろに現出する。

「西暦1121年、梁山泊」

二人は女の気配に勢いよく振り返る。

「私の真実、私の目的、猫耳の意味——そこで総てを話そう」

そう言い残して、女は跡形もなく姿を消した。

「……どういうこと？ それに梁山泊って」

藤丸立花はカルデアのマスターとして多くの英霊と関わっているながら、歴史や神話についてあまり明るくはない。併しそんな不確かな知識であっても「梁山泊」という名前にピンとくるものがないわけではない。

燕青が登場する水滸伝に登場する百八人の好漢達の根城——立花にもそういった認識くらいは出来た。

「レイシフトしろってことだろ。宣戦布告しに来たんだよ、あの女」

一体何が目的なのだろうか？

立花は一瞬疑問に思ったが、その答えすらも行かなければ分からないのだろうと、先程の女の口ぶりから推測した。

ならば、一刻も早くレイシフトをしなければ。

そう思っていた矢先であった。

『マスター藤丸立花、サーヴァントアサシン燕青。至急管制室までお集まり下さい。緊急ブリーフィングを行います』

施設内にアナウンスが流れた。

マシユの声であった。

「このタイミングでブリーフィング？」

「さっきのヤツと無関係ってわけじゃなさそうだな。急ぐぞ、マスター」

†

緑も水もない鋼のような灰色の大地に、不釣り合いな雲一つない青空に太陽が十。

その下に小さな集落があつて、地獄のような有様の中でもそこには人が溢れ活気があつた。

女が現れたのはその集落の中心であつた。

突然現れた女に人々の視線が集中する。女はそれを気にすることなく、簡素な木の椅子に腰かけた男の前に立った。伊達を気取つたように煙管のようなものを吹かしているが、男らしさや凄みといったものがどこか欠けている、一見すると腑抜けた印象の男であつた。

「員外けえ。今まで何処に行つとつた？」

男は女が目の前に立つまでその存在に気が付かなかつたのか、殊更に驚いた顔をして

煙管を口から外した。

「何処でもない。否、今の私はそもそも何処にもない。赤子の見ている夢、匣に詰められた猫のようなもの——黄梁が炊き上がるまでの盧生が人生の方がまだはつきりとしてゐる。そう申したでしょうに、宋江様？」

「俺（おい）にはお前（まん）の言うところがよう分からん。俺（おい）、阿呆じゃけえ。目の前にいるお前（まん）がお前（まん）じゃあいけんのかえ？」

すつ呆けたような顔をする腑抜け男——宋江の言に二、三度瞬きすると女は顔を覆い、

「クツハハハハハハ！」

天を仰いで哄笑した。

「貴方は何も変わらない。何処にあつても、こうしてここにある真実であつても、総てが偽物であるはずの私の記憶であつても。宋江様は宋江様だ」

「……ずつと気になつとんだが。お前（まん）は俺（おい）をよう知つとるような口ぶりじゃが、俺（おい）はお前（まん）を知らん。それになんじゃ？ 偽物（バツタモン）だ、真実（ホンモン）だのとしやらくさい。俺（おい）は此処における俺（おい）だけじゃし、お前（まん）は此処におけるお前（まん）だけじゃろうに」

「良いのです。貴方はそのまま置いて下さい」

女はそつと目を閉じた。

瞬間、宋江の手から、煙管が落ちた。

宋江は口元が異様に湿るのを感じた。次に感じたのは全身を焼くような熱。それは胸から起こっていた。

宋江は恐る恐る、自分の胸を見た。

腕が、突き刺さっていた。女の、腕が。まるで杭のように、己の心臓に。

「なんじゃ？ なんじゃコリヤアアアア!?」

状況を理解し、宋江は狂ったように叫ぶ。

「さようならの代わりに。如何か許して下さい。私の目的の前に、私が求めたものに貴方は不要なのです」

「騙しとつたんか？ ワレ、俺（おい）を騙しとつたんかア!?」

「は、い」

宋江が見たものは女の涙であった。

「私だつて貴方を騙したくはなかつた。貴方と共にあるのも一興かと思つた。でも駄目だつた。私を私として定義してしまつた以上、こうせざるをえなかつた」

「何をワケ分からんこと言うとる!? 俺（おい）を騙しとーなかつたなら、俺（おい）と一緒にいりや良えじやろ！ 俺（おい）がこの国んぶつ壊して、みいんな笑顔んなる良い

国作るまで一緒にいれば良いじやろうが！」

女は押し黙り、宋江の胸から腕を引き抜いた。

瞬間、宋江は椅子から転がり落ちた。

「畜生、悔しいのオ。俺（おい）が阿呆だから！ 悔しいのオ！」

泣きながら宋江は、息絶えた。

「……いいえ。貴方は阿呆で良い」

女はそう言つて立ち尽くした。

「貴様ア！ よく首領を！」

「許さん！ 許さんぞ！」

宋江はこの集落の長であつた。

その死に怒りを表し、彼の配下であつた男達がそれぞれ武具を手にし女を取り囲む。

「フッフ。これにて水滸伝完結！ これにて魔星失墜！ 既に好漢は要らず！」

女はニタリと淫蕩な笑みを浮かべて宣言する。

「あとは彼がこの肉に還るのを待つだけ」

と――。

第一話 十の太陽

立香と燕青が管制室に着くと、そこには二人の女性——片方はそうカテゴライズして良いものか定かではないが——がいた。

一人は白衣姿の眼鏡がよく似合う菖蒲色の少女であった。先程のアナウンスの声の主、立香にとつては「マシユ・キリエライトである。

そしてもう一人は、女性を描いた絵画の中で恐らく世界で最も有名な「モナ・リザ」を思わせる顔立ちをしたキャスターのサーヴァント——カルデア一の技師、そして現在はカルデアの所長代理を務める万能の天才レオナルド・ダ・ヴィンチである。

「二人とも突然呼び出して済まないね」

ダ・ヴィンチはどこか定型的な謝意の言葉から会話を始め、そこから本題に移ろうと
していた。

だが、

「事情は分かっている。特異点が出来てんだろ？」

次の瞬間には彼女はあからさまに吃驚した顔をして口笛を吹いた。

「話が速くて助かるね。その通りだ。で、年代と場所は……」

「1121年の中国……だろ？ しかも、梁山泊があつた辺りだ」

「待て、なんでそこまで分かるんだ？ いくらなんでも理解力があるとか、そういうレベルじゃないぞ」

「そりやそうさ。だってそのレベルじゃねえんだから。なんせ、その特異点と関わりのある……いや、あれは多分黒幕だな。そいつに教えて貰つたんだ」

燕青が話した内容にダ・ヴィンチは目を剥いた。

「どういふことですか？」

マシユは困惑するばかりであつた。

立香は先程二人が遭つた人物について、また立香が見た夢について話した。

「馬鹿な!? 侵入されていた!? いや、侵入されていたのに気が付かなかつた?」

狼狽えながら、ダ・ヴィンチは装置の前に立ち、カタカタとキーボードを打つた。

「ホントに侵入されてる。しかも、なんだこれ? 転移というなら何かしら魔術的な痕跡が残るものだがこれは、突然現れている」としか言いようがないぞ。それにどういふことだ? その侵入者が撤退するまでの時間の中で、数値的に完全に消滅している時間帯がある」

「それなら会話の途中で瞬間移動みたいなことをしてたからそれなんじゃないかな?」

並べられた事実珍しく苛立ちを見え隠れてさせているダ・ヴィンチに立香が口を挟

むと、

「いや、違う」

きつぱりと否定した。

「さつきも言ったと思うが魔術的な転移であれば何かしらの『予兆』やそれがあつたという『痕跡』がある筈なんだ。それに転移者が完全に消えるわけじゃない。転移じゃないんだ、これは。一度完全に消滅した後、今度は前触れもなくそこに再生した……それこそ在り得ない事象を考えないといけないんだ」

先程の一連の遣り取りは万能の天才でも分からない現象であつたのだ。

燕青はそこに胸騒ぎを覚えた。

果たして宣戦布告してきたからとそれに乗って良い物なのかと。

「でも相手が意味不明なものだからといって特異点を放置して良い訳じゃない。今までだつて特異点を起こした元凶が分からないまま戦ってきたんだ」

併し、立香は意外にも前向きであつた。

燕青と共に謎のサーヴァントに対峙した時や、夢の話を語っていた時は恐れていた筈なのに、顔からは恐怖が消えていた。

燕青は以前、マシユが立香について語っていたことを思い出した。

『自分しかいない、目の前の状況を避けられないと分かつた時先輩は本当に強い』――

—と。

成程、その通りかもしれないと燕青は思った。

「そうですね、先輩！」

マシユもその勢いに乗せられ、表情と声色に凜とした強さが点っていた。

「ところでマシユ、一つ良いかな？」

「はい、何でしょうか？」

「1121年の中国って何があつたの？」

……気持ちに伴って、もう少し知識も増やせば良いのと言いかけて燕青は口を噤んだ。

主というには立香には威厳というものが欠けている為、つい軽口が出てしまひそうになるのだ。

「特異点が観測されたおおよその地点で起こつた出来事だと、宋江が起こした反乱でしようか？」

「宋江って確か水滸伝の主人公だよな？ でも、水滸伝ってあれ創作なんじゃないの？」

カルデアの英雄は多く例え神話であっても歴史上に生きていた痕跡が確認されている者が殆どであるが中には本来は実在しない存在もいる。

例えば、立香の隣に立つ燕青がそうだ。

故に立花は水滸伝の物語が総て作り話だという認識をしていた。

「その通り。あの物語に登場する人物の殆ど——そこにいる燕青を含めた魔星の転生体たる好漢達や彼等の歩んだ英雄譚は殆どが虚構に過ぎない」

だが、とダ・ヴィンチは続ける。

「水滸伝の中にはただ一つ、ただ一人、実体がある者がいる。それが宋江——水滸伝に於ける主人公、梁山泊魔星が第一位、天魁星を背負う好漢だ」

「実在したあの人が本当に好漢だったかなんて分からんけどな」

燕青は皮肉った。

そもそも水滸伝とは北宋時代の中国に実在した宋江という人物が三十六人の将を率いて朝廷に反乱を起こした史実を題材に作られた英雄譚であるが——その性質は歴史書ではなく娯楽小説（エンタテインメント）である。

娯楽に求められるものは正しさよりも、より人を惹きつけられるか否かだ。故に、宋江が実際の反乱で犯した狼藉三昧の殆どは除かれる。

何故なら英雄譚に求められるのは残酷劇（スプラッタ）ではなく澆刺とした活劇なのだから。

「燕青の知ってる天魁星はどうだったの？」

立香は気になって訊ねた。

「そんなものに意味なんてないだろ。今ここにいる俺なんてホントはいなくて、俺の中にあるあの人も全部嘘なんだから」

何でもないようないつもの軽い調子で語る燕青であったが、立香は悲しさを覚えた。今ここにいる燕青が自分を嘘だと言ってしまうことが立香には許せなかった。

何故なら、燕青は此処にいて、そんな彼が感じてきたものは彼の中では真実であった筈だから。

確かに燕青は実在しなかった英霊だ。実在しなかった故に、その存在は砂上の楼閣のように危うく、こうしてサーヴァントとして成立する為にはドツペルゲンガーという曖昧模煇な幻霊でもって補強しなければならなかった程、その存在強度は危ういものである。

だが、それでも燕青は此処にいるのだ。人々が、藤丸立香が生きる為の明日を創る為に力を貸してくれた義侠は確かに此処にいるのだ。立香はそれを誰にも否定させたくはなかった。

——誰にも。それは、仮令燕青自身であっても。

「てか、ダ・ヴィンチ姐さんよ。ひよつとして時代が時代だったから俺を呼んだってことならソイツは意味ないぜ」

併し、そんな立香の心の内を燕青が知る術はない。

「それは如何してだい？」

「物語ほど歴史を正しく映さないものはないのさ。考えてみる。作家がそこら辺をちゃんと考えているっていうなら、シェイクスピアの旦那の作ったモンの描写が実際のクレオパトラ姐さんをこれっぽちも捉えられていない理由つてのを説明して欲しいもんだ」「でもそれを含めても一番近い時代なのは君だろう？」

「……ま、他の中華出身の奴らに比べりやそれはな」

ダ・ヴィンチとの何気ない会話の中でも燕青は残酷な程、自分が虚構であることを強調する。

「それにあの女、どうやら俺をご指名らしいし正体と心当たりがあるしな。俺が選ばれたのは間違いないだろ。……俺の顔に張り付いた指名料が安いなんて俺自身思わんがね？」

燕青はダ・ヴィンチに詰め寄ると、彼女の髪を手の中で遊ばせた。

「私の美しさを讃えてくれるのは嬉しいことだし、君の顔も悪くはないと思うけど……指名料は全額その猫耳女に請求してくれたまえ」

ダ・ヴィンチは笑顔で燕青の顔を払いのけた。

「んじゃ、とつとと取り立てに行くか。夜逃げでもされて踏み倒されたんじやたまつたもんじやないからな。なあ、マスター？」

と燕青は立香に話を振った。

「あ、うん。そうだね」

立香は無理矢理笑顔を作り、戦いの前に空気を悪くしないようにと、これ以上踏み込まれないようにダ・ヴィンチにレイシフトを始めるように促す。

↑

そして、誤魔化しの先で待っていたのは燃えるような灼熱の空と、草木も水も何もかもが枯れひび割れた鉛の大地であった。

「暑い！ というか、熱い！ なんだこれ！ エルサレムの時より熱い！」

まさか中国まで来て暑さ以上に熱さを感じるようになるなどは立香は思ってもみなかった。

「燕青、中国ってこんなに熱いの？」

「そんなわけねえだろ。異常気象だよ、異常気象。どう考えたって」

そうぼやいた瞬間、カルデアからの通信が入った。

『無事レイシフト出来たみたいですね、先輩』

「うん、ちゃんと普通に直立してた」

立香が思い出したのは1999年の新宿にレイシフトした時のことであった。

———そういえば、燕青と初めて会ったのも新宿だった。

そんなことを思い出しながら。

『ヤツホー伊達男。久しぶりの梁山泊はどうだい?』

「どうもへったくれもねえ。『水滸伝』ってのは『水辺の物語』とかそういう意味なんだがこれはどうよ? 何だこりゃ? 枯山水とでも言いたいのか?」

百八魔星の本拠地である梁山泊とは黄河のほとり、近くに聳える梁山という名の麓にあつた広大な沼沢である。

『他に、干ばつ以外に何かおかしなところはあるかい?』

「おかしな所……」

立香は辺りを見渡した。

おかしなところは何も無かつた。否、おかしな所どころか地平線の彼方まで此処には何も無かつたのだ。ただただ無限の荒野が広がっている。

途方に暮れて立香は空を見上げた。

「……太陽が十つ?」

すると、青い空に輝く太陽が一つではないことが目に留まつた。

目の錯覚かと思ひ何度も目を擦っていると、

『先輩のバイタルになんら問題はありませぬ。勿論、目になんらかの疾患があることも。至つて健康です』

立香の精神・肉体の状態を数字として観測しているマシユが指摘する。

『成程、つまり本当に太陽が十個あると……』

そう言うときダ・ヴィンチは唸り、職員に指示を出した。

それは立香が見た太陽を数値化することであつた。

『当たり前だけど、太陽が九つ増えたというわけではないらしい。本物は一つ。他の太陽は疑似天体だ。本物の太陽よりずっと小さくて、ずっと近い場所にある』

『でも本物の太陽と同じように光も熱も発してる?』

『その通り。本物に比べればその量は微々たるものだが、何せ本物よりも近い場所にある。地上に降り注ぐ熱量は本物の太陽にも匹敵するだろうね』

あとは単純な理屈である。

この異常な干ばつは八つの疑似太陽が原因――。

「まるで『后羿』だな、こりゃ」

「后羿?」

燕青が空を見上げながら呟いた単語を立香も鸚鵡返しに呟く。

『后羿は神代の中原――今の中国に存在した英雄ですね。中国でも屈指の弓の名手で創造神が生んだ十の太陽の内、九つを撃ち落して日照りに苦しむ人々を救つたとされています』

マシユの説明に立香はへえと簡単な声を漏らした。

「……全く。とんでもないことしてくれたな、この特異点の黒幕サンはよ。度が過ぎて
るぞ、これ」

立香はそれに同意した。

十二世紀の中国は間違いなくこの日照りで滅んだ。

だが、黒幕が——あの夢に出てきた女がどうしてここまでしたのか立香には分からな
かった。

「こんな有様じゃ、生きた人間を探すのも大変だねえ。あの女の所に辿り着くのものな」

「取りあえず、歩くしかないよ」

二人は沈痛な思いで歩き始める。

一体どれくらい歩くことになるか見通しが立たないまま歩き始め、けれど事態はすぐ
に動くこととなった。

「あ、人がいる」

立香は人を見つけたのだ。

影絵のようにも見える人の姿を、確かに。

「燕青、人だ！ 人がいる！」

「おい、待ってって」

立香が突然走り出したので燕青は慌ててそれに続いた。
だが、

『待て！　そこにいるのはシャドウサーヴァントだ！』

ダ・ヴィンチが声を荒げた為に二人は足を止めた。

シャドウサーヴァント。サーヴァントに最も近いがそうはなれなかったもの。英霊として力が足りなかった霊体、または英霊を召喚しきれなかった為に生まれた影なる存在。

それがシャドウサーヴァントである。

「全く気配を感じなかった……」

『仕方ないさ。シャドウサーヴァントと言ってもかなり弱い』

失態に顔を顰める燕青をダ・ヴィンチはフォローする。

「夢が終わった。俺《おい》の夢が終わってしもうた」

二人に気付いた泡立つような影絵が語り始めた。

「俺《おい》と仲間が聖四文字ばなる夢じゃ。俺《おい》と仲間がのあんなる夢じゃ」

うわごとのように、併し悍ましい憤怒を以て紡がれた呪詛を吐きながらシャドウサー

ヴァントはフラフラと立香と燕青に近づいて。

「終わつちもうた。だから……皆死ぬしかないじゃろい！」

構えも何も無く、野獣のように闇雲に飛びかかった。

第二話 時雨は濁った色をしていた

人の形をした黒が遣って来る。

疾風怒濤の速さで以て。

だが、立香はたじろがない。相手が戦わないとならない相手だと認識した瞬間には立香の思考は戦闘へと切り替わる。

「通すかよー！」

そんな彼の指示を受けるまでもなく、彼の眼前に現れるのは小さいながらも厚く屈強な背中と其処に刻まれた“義”の一字。

「何処の誰かは知らんが——我が主には指一本触れさせん！」

言うまでもなく、燕青である。立香に迫るシャドウサーヴァントの肩を両腕で掴み軌道を止めると、

「ウガッ……！」

そのまま爪を立てた。

瞬間驚くべきことに、シャドウサーヴァントの肉体に燕青の指がめり込んだ。

秘宗拳の基本的な動きの中には、相手の体を掴んだ状態から指先にのみ力を入れだ

メージを与えるというものが存在する。

燕青が今やったのはそれであつた。

与えられたダメージは実際の所そこまで大きくはない。併し、相手の体格、筋肉量などを無視し確実に相手を怯ませることが出来る。

その隙を利用し、燕青は渾身の力で両腕での掌底——八極拳で言う所の虎撲を放つ。

「アガッ……」

掌底はシャドウサーヴァントの腹にねじ込まれ、その勢いで以て体が僅かに後方にずれる。

燕青の反撃はここで終わることはない。

更はその軌跡を追いかける形で懐に潜り込み低い姿勢から掌底を放ち、顎をかち上げる。そして、仰け反り持ちあがつた頭に、回し蹴りを放ち、更に後方へと吹き飛ばす。

着地点に目掛け燕青は疾風怒濤の速力で以て追撃を掛けようとする。

併し、

「俺（おい）の名あば……」

譫言と共に立ち上がったシャドウサーヴァントに只ならぬものを感じ、燕青は動きを止める。

「宋江……及時雨と呼ばれた男……」

彼の輪郭をぼやけさせていた影が晴れて行き、その姿を明らかにする。

白い髪をした男だった。醜男とは言い難いが、かと言って美しいとも言えない簡素な鎧に身を包んだ男であった。

——目の本来であれば白い部分が黒く、黒い部分が赤い、怒みに満ちた顔をしている。それ以外にはとくに取り立て言及すべき点はない人というのが、立香の率直な感想であった。

併し、そんな、男の顔を見て燕青は目に見えて動揺していた。

「宋江……だと……どうしてアンタが……」

男がそして燕青が口にした名前に立香も反応する。

「この人が梁山泊の頭領の？」

燕青は小さく頷いた。

「……恐らく歴史に実在した『本物』の、この時代のあの人だ。だが、シャドウサーヴァントならまだ分かるが、急にサーヴァント化したのはどういう理屈だ？」

燕青の疑問に答えたのはダ・ヴィンチであった。

『恐らくあの太陽が原因だ。あれの所為で大地に貼られたテクスチャってヤツが少し溶かされてるんだ。そこから神代の真エーテルが流出している』

その事実立香は文字化出来ないような驚愕の声を上げ顔面を蒼白させた。

真エーテルとは、神代の大気に満ちていた魔力のことである。

西暦以降の地脈から供給される大源などとは比べ物にならないエネルギーを持っており、現在地球上に満ちる人間の肉体にとっては有害である。

立香の動揺はそれを知識として得ていた為であった。

若しかしたら現在進行形で自分の体は汚染されているのではないかと恐れたのだ。

『大丈夫だ、人体にはギリギリ影響が出ない濃度で収まっている』

ダ・ヴィンチの言葉に、立香は一先ず胸を撫で下ろす。

併し、安息の時間は長くなかった。

『だが、靈的な存在にとつてはその限りではない。精々が強力な怨霊としてしか存在出来ないものを補強するだけの強力な後押しとなるだろうし、観測地点に於ける聖杯の存在、当人の英霊としての資格などの要素が重なれば……』

サーヴァント宋江の手に青白い光の粟粒が集まり、長柄の武器を象る。

鯨の鱗程はあろうかという巨大な白刃。そこに描かれるは翡翠の鱗を持った龍。

宋江の腕に握られたのは宝具であった。

然もそれは、青龍偃月刀——中華が誇る大英雄、軍神関羽の武具として知られたモノ。

『十分、サーヴァント化させ得る』

遍く怨嗟を振りまく瞳の儘に、宋江は燕青と立香に偃月刀を向ける。

「俺（おい）は腐り切った官の所為で腐つてしもうた中華を焼こうとした。そんで実際に焼いた」

誰に語っているわけでもない。

謳っているだけだ。自分の在り方を。

「そこから何もかんもやり直すつもりじゃった。じゃけどん、俺（おい）は裏切られた。俺（おい）にそうするしかないと言うた筈の仲間ん裏切られた。死んでもうた。だったら、もう終わりじゃい。皆、くたばるしかなかるうが」

全く以て自分勝手な恨み言をばら撒き乍ら、嘗て理想に燃えていた筈の男は吠える。

「じゃけえよお、テメエも死ねや！」

理不尽な殺意を。

先程とは比べ物にならないような速力だった。

燕青の目前に宋江の姿が現れたのは。

「なっ!？」

「// 終ぞ遠き氷の龍牙（チンロン・グアンダオ）// —— 死に晒せエ！」

燕青は驚愕した。

宋江が振るう青龍偃月刀に強力な冷気が宿っていたからだ。

困惑の中にも関わらず、それでも紙一重で燕青は刃を躲しながら、生まれた疑問に向

き合つた。

——今のは関勝の旦那の技……なんでこの人が……。

燕青の頭に浮かんだのは、記憶の中にある仲間の名前。

自らを大英雄関羽の子孫と嘯き、強い憧れを抱き、ついには関羽がそうであつたように振るう刃に冷気を宿した男の姿。

この技は自らの理想に近付こうとした男の執念が形になつたもの。他の誰かに使われて良い技ではないと燕青は断じる。

加えて燕青の記憶の中にいる宋江は豪傑というにはほど遠い人物であり使いたくても使えない筈なのだ。

——なのに如何して？

併し、目の前の敵はその疑念に答えるわけはなかつた。

一心不乱に、嵐のような斬撃を燕青に浴びせるばかりであつた。

——それにしてもなんつー技のキレだ。まるで旦那そのものじゃねえか。

戦士としては平凡であつた筈の宋江の攻撃に併し、燕青は防戦一方となる。故に気がつかなかつた。

自分の体に札を貼られていたことに。

それは道（タオ）の術理で作られた呪符であつた。

「ヤバッ……」

「喝ッ！」

宋江の声に呼応して、呪符に組み込まれた術が発動し、爆発を起こした。

その威力で燕青の体は大きく弾かれる。

「燕青！」

思わず立香は自身のサーヴァントの名を呼んだ。

『先輩、危ない！』

信じ難い事態に一瞬、意識が飛んでいたのだらうと、立香は思った。

通信から入るマシユの声が耳に届いて、漸く自分のすぐ目の前に宋江がいることに気が付いたのだから。

既に青龍偃月刀を振り被っている。振り下ろされるまでに刹那とかわらないだらう。

——ヤバイ、死ぬ。

立香の中に不意に恐怖が湧いた。

——いや、死なない。

直ぐにそれを振り払う。

——まだ、燕青が戦える。こんな俺を主と言ってくれるサーヴァントを信じろ！

希望がそこにはあったから。

「燕青、瞬間強化！」

本来魔術師ではない立香でも魔術を使えるようにするための礼装。その力を今起動する。

強化——あらゆる概念を補強する魔術であり、堅いものをより堅く、鋭いものをより鋭くする。そういった系統の魔術である。無論、それを肉体に適応させれば、身体能力を向上させることが可能である。

「ウオオオオオオ！」

爆破のダメージで地面を転がっていた燕青は、その痛みを押し込めながら立ち上がり、立香が起動した強化の術式の効力を借り、爆風受けた傷を抱えながらそれでも立香の元へと駆けつける。

その速きこと、まさに疾風迅雷。

「デリヤアアア！」

瞬間強化というだけあり、その効力は一時的なものである。

故に燕青は躊躇わず、守りよりも攻撃に転じる。

立香の頭に偃月刀が振り下ろされるよりも先に宋江の鳩尾に肘をねじ込んだ。

「ウグッ……！」

宋江の体が後方に弾き飛ばされ、立香に振り下ろす筈だった偃月刀を地面に落す。

地面を転がる嘗て自分が属した集団の元締めだった人物を見降ろしながら、

「アンタだろうが許さんぞ。主に、触れる事は！」

満身創痍であるのに、それでも強い語気で言い放つ。

「……主も無茶をしたな。俺が立ち上がる保証も無かったらうに」

「だって、俺は信じてるから」

燕青は礼装に備わっている回復術式を起動させ、自身の傷を癒しながらあつけらかなとした顔でそう言つてのける立香に面を食らつたような表情をした。

「……それよりも、一体あの宋江はどういうことだ？　なんで偃月刀を使えるんだ？

それにあの人は別段術に明るいというわけでもなかった筈だ」

自分に向けられる、一点の曇りもない信頼に耐え兼ねた燕青は通信の向こう側にいるダ・ヴィンチとマシユに語り掛けた。

『恐らく、宋江さんには他の魔星の宝具や技能を使うというスキルか宝具があるのではないのでしょうか？』

マシユが仮説を述べた。

「そんなことが在り得るのか？」

『宋江さんは、水滸伝の中では“魔星を統べる者”として描かれています。ならば、百八の魔星そのものを宝具として持つていてもおかしくはありません』

「簡単に言ってくれるなよ……」

燕青は珍しく泣き言を漏らした。

だが、その気持ちは立香にも理解出来た。宝具の保有数が英霊の強さを決定するといふわけではないがそれでも百八という数字は大きい。

加えて先程の戦いで戦いの素人である立香の眼から見ても、明らかな程に動きが変わっていたこと、強力ではあるが宝具とは言い難い呪符による攻撃をしたことなどから、宝具の他に戦闘技能やスキルを借りることが出来る可能性もあった。

手強い敵であるのは間違いなかった。だが、それ以上に、

「殺す、殺す、殺す、コロスコロスコロスコロス！」

立香の目には、何に向けているかも分からない殺意に燃えながら、人とは思えない動きでそれでも立ち上がろうとするこの男が哀れに映って仕方なかった。

ふと立香は隣に立つ燕青の顔を見た。

沈痛な面持ちであった。

仕方ないと立香は思った。燕青にとっては、この哀れな殺意の塊は、見知った人なのだから。一体、記憶の中の顔とどれほど似ていたのかは分からない。その記憶すら本来だったら虚構に過ぎないものなのかもしれない。

それでも、燕青はここにいて、そこから発生する悲しみも現実のものだ。

「燕青、この人のこと助けたい？」

それを思っていたら、自然と立香の口からはそんな問いが出ていた。

「……そんなこと今は重要じゃないだろ。どのみち倒さないと」

「そんなわけないだろ！」

立香は感情のままに怒鳴り散らした。

理不尽極まりない、感情の昂りであった。

「誰でもない今ここにいる君の感情だぞ！ 大事じゃないわけないだろ！ それがどんな時だって！」

一寸先まで近付いた立香の目を見て、燕青は大きく目を見開いた。

藤丸立香は弱い人間だ。

力で言えば熊どころか人すら殺せないような弱い男だ。

その癖、燕青の記憶の中にあるどんな瞳よりも力強い瞳をしていた。

「——嗚呼、助きたい」

自然と感情の儘に、これまで自分が偽物と冷めた見方をしてきた感情の儘に、燕青はそう思いを口にしていった。

実際に助ける方法などあるわけではない。立香もそれを承知だ。

それでも、燕青は助けたいと口にした。

「ならやろう」

そう笑顔で返すと立香は、次の瞬間には宋江へと視線を向ける。

漸く立ち上がり、手には二つの長柄の武器を持っていた。

一つは穂先が蛇のように螺旋くれた矛、もう一つは呂布が持っているものと同じ形をした戟であった。

「蛇矛に、方天画戟か……厄介なのを出してくれたねえ」

特に蛇矛は水滸伝の物語の中でも抜きん出た豪傑の武装であった。

だが、何を恐れることがあるうか。燕青には立香がいる。

「……奥義を装填する。頼むぜ、マスター」

「分かった」

立香は己の右手を見る。其処に刻まれているのは赤黒い、三つの区画（パーツ）で構成された刺青のようなもの。

令呪——魔力の塊であり、戦闘に於いては三回までサーヴァントの宝具使用に於ける魔力消費の代替、及びサーヴァントの霊基の回復を行う代物である。

立香はこれを一っ切り、燕青の鬼札たる秘宗拳の奥義を発動させようとしているのだ。

「令呪を以て命ずる」

今まさにその時であった——。

「待ちたまえ」

彼の右手首をそつと何者かが掴んだ。

立香はゆっくりと首を動かした。

思いの外、首が痛かったのは、顔の位置が自分よりも高い場所にあつたからだ。

そこにいたのはカルデアに現れた黒衣着流しの女であつた。

「お前……は……」

「無粋だと言つても良いだろう、私のこの行動は。でも困るんだ。今、燕青に出しきつてくれると」

その言葉と同時だつた。

宋江の胸に大きな穴が穿たれた。

いつの間にか宋江の傍に移動していた女が、貫手を放つたのだ。

「手前エ……一度ならず二度までも……」

「済まない。何度も酷いことをしてしまつて」

心からの悲しみを顔を湛え、併し、女は、もう一度、宋江の胸に貫手を放つた。

「でも許して下さい。貴方に出し尽して、打ち止めは困るのです。私に出して欲しいから。愛しい燕青の総てを。私の胎内に還る燕青を」

燕青。

その名を呼ぶ女の顔は紅潮し、声には淫靡な熱が点っていた。

「貴様……」

「怒った顔も良いね、燕青。正直、孕みそうだよ」

当の本人は怒っているにも関わらず、女は恍惚とした表情で燕青を見つめていた。

「……だが、その怒りを今は鎮めて欲しい。これでも私だつて義侠の端くれ。君らとした約束を守りたいのだ」

「どういう意味？」

「総ての真実を話すと言うことさ、藤丸立香」

にっこりと、女は笑みを以て立香に帰した。

立香は意外に律儀だなど、呑気な感想を抱く。

「でも如何しよう……どこから話したものか……」

「勿体付けた態度を取るんじゃないやねえ。まず、手前の真名からだ」

「どういうわけか女の前で苛立ちを隠せない燕青であったが、女はそれを気にした素振りを見せなかった。

それどころか自分の興味の対象である燕青直々の要求とあつてか殊に嬉々とした顔をしていた。その感情を反映するかのように頭上の猫耳もびこびこ動いている。

「では、答えようか、私の名前を」

その後続いた名を信じがたいと言ったのは燕青であった。

その燕青に立香は誰なのかを訊ねた。

「嘘ではないさ」

女は真実であることを改めて強調し、再び自分の名を口にする。

「私の名は盧俊義。玉麒麟と呼ばれた男。燕青の胎盤、燕青の子宮、燕青の総て」

ニタリと笑った女の口は、紙を切って作った三日月に似ていた。

第三話 麒麟

立香は盧俊義について知っていることと言えば、名前と燕青の師であるということだけであつた。

魔星として司る星が天罡星であるといことも、玉麒麟というその英雄を讃えた渾名にも心当たりはないし、武勇と富と人格の三つに於いて優れていた“三絶”であつたことなど知る由もない。

知る由も無かつたが、
「如何して女なんだ？」

この一点が不自然であることだけは言い切ることが出来た。

立香の中にある水滸伝という物語に纏わる情報から類推するに盧俊義とは燕青と同じく存在しなかつた人物である。

であるならば、英雄盧俊義の全体像を構成するのはその名を認知する人間のイメージの積算に他ならない。

テキストに“男”と書かれているのに誰が“女”を想像しようか。曲亭馬琴の著作物を前提に置いたとしても——である。

そもそも以前、立香は生前に仕えていた主のことを燕青に聞かされたことがあるが、その時彼は自分の主を「あの男」と明言した。

「この柔肌がそこまで気になるものかね？」

盧俊義は含んだような笑みを立香に向けた。

「何のことはない。君の背中に隠れている可憐なる万能と似たようなものさ」

通信機に向こう側にいるダ・ヴィンチは目を見開いた。

一体何処からそれを知り得たのか、或いは彼女の想像力がたまたま自分自身の在り方を言い当てたのか。ダ・ヴィンチは映像の中に在る盧俊義の表情を覗き込む。

嘲るような微笑の奥には何も感じられなかった。それどころか、彼女について詳密に捉えようとすればするほどに、その輪郭はぶれるばかりであった。

「元々は男だけど、現界する時に女になったってこと？」

ダ・ヴィンチが半ば狼狽する一方で立香は盧俊義に問いを投げる。

「……私はその偉大な画家とは違う。実態と言えるものがないのでね。発生するに当たって、自分を女として定義したまでのことさ」

「如何してそんなことを？」

「その燕青が男として現れたから……と言えば分かるだろうか？」

その答えは立香にとって理解し難いものであった。

盧俊義は嘆息した。それは自分に向いたものではなく、盧俊義自身に向いているように立香には感ぜられた。

「この私にあつたその子に対する想いは男のまま抱え込むには余りにも気持ち悪かつたのさ。……胎内に愛しい男を宿したい。こんな願いは男という性では許されないのだよ」

「女だからって許されるもんでもねえと思うけどな。現に俺、結構鳥肌立つてから」
燕青の指摘に、盧俊義は青天の霹靂といったような表情を浮かべた。

「んで、この特異点を起こしたのもその糞下らねえ、片思が故ってかよ？　なあ、盧先生よお？」

「察しが良いな。流石は私の燕青だ」

「アンタのモノじゃない！」

激昂する燕青を前にしても、盧俊義は涼しい表情をしていた。

「そう言いたければ言えば良い。寧ろ、そちらの方が少し興奮する」

頬の紅潮を隠しもせず、そう言つてのける盧俊義に燕青は話を聞くより先に殴り掛かりかねない程に怒りをあらわにした為、立香は死に身の思いで彼を抑えた。

サーヴァントと人間の埋めがたい力の差を考えればこれがどれほどに危険なことであるかは言うまでもないだろう。

「盧俊義、話してくれ。如何してこんなことをしたんだ？」

燕青に矛を収めさせるために、立香は必死に言葉を繋ぐ。

「フツ、義侠は約束を違えない。故に話そう。私の発生の際緯——は、まあ良いだろう。ある所に幻霊と幻霊を混ぜサーヴァントを作る試みをした者がいた。それは良い。重要なのは私がその時空に於いて聖杯を手に入れたということだ」

そう語りながら翳される彼女の掌には黄金の杯が在った。

『聖杯……』

「改めて言い直さなくても良いよ、キリエライト。君の先輩だつて分かっていることだ。だがここで前提としなければならぬのは、発生した私にこびり付いていた願いを叶えられるものではなかったということだ」

「願いつて？」

「愛しい燕青が欲しい。何度も言っているだろうに。藤丸立香、君は少し、色恋というものにもう少し聴くなるべきだ。屹度泣いている女や男は海の砂より多いぞ？」

色恋云々について、立香は反論こそあつたがそんなものはどうでも良かった。

此処で論ずるべきは、盧俊義の聖杯が燕青を作ることが出来なかつたという点だ。自分が複合幻霊という事象を以て現出している以上はそれに因つて燕青を生み出すという発想もあつて然るべきだ。無論、盧俊義もそれをしようとし、結果失敗した。

自分を生んだ何者かの技術を彼女では再現出来なかったのか、それとも聖杯の出力が原因なのかは立香には分からない。

問題なのは、盧俊義がその後、何を選んだかだ。

「……燕青が発生する可能性に掛けた？」

「よくそんな突飛な発想に至れる……」と思つたがそもそも君や後輩、そしてそのサーヴァント達が歩んだ道程は、そこを通ろうとするだけでも阿呆の所業と言えるものだった。考えついて当然か」

「いや……俺には、マシユヤカルデアの皆、そしてサーヴァントがいた。でも貴方には貴方しかいなかった」

「私しかいなくとも私にはこれしかなかった。だから、やった」

本来歴史に存在しない筈の燕青が英霊として成立すること。

英霊として成立した燕青がサーヴァントとして呼び出されること。

呼び出されたサーヴァントが、特異点に干渉出来ることなどクリアしなければならぬ
前提条件が多すぎるのである。

「だが、ここで問題があつた。特異点を発生させ、維持させ続けるといふのは存外に難しいということだった。それに歴史が歪（ひず）むだけの事象を考えつくにはそれこそ突飛な発想が必要でね。私に思い付いたのは、ただの盗賊に聖杯で力を与え百八魔星を名

乗らせ水滸伝を物語から事実へと昇華させるくらいなものだった」

『百八魔王の存在？　しかし、そんなものは……』

「君らが来たのは宴の始末が済んだ後だったというだけさ。あつたんだよ、此処には全部、私が殺してしまつたが」

盧俊義の語り口はまるで、読み終わった本を閉じたただ棚に戻したかのように軽い。

「じゃあ、さっきの宋江は……」

「祭りが終わったのに、出店の跡に子供が座っていることがある。あれはそういったものだ」

彼女の言い草は嘗て主だった男に対するものではなかつた。

「……盧先生、宋江様は貴方に利用されていたと言つた。それは誠か？」

「あの方の認識に何も間違いはない。私はあの人を己の目的の為に利用した」

「それに対する後ろめたさのようなものは無いのか？」

「無論、ある。私はあの人を手を手に掛けた時、私と共にあつた者達を演ずることになつた者達を手を掛けた時、胸が張り裂けそうになつた。確かにこの目は涙を流していた。それは嘘ではない」

そうか、と燕青は捨て鉢なため息をついた。

悲しみと失望が表情に入り混じり、そして次の瞬間には敵意に変わり、拳が構えられ

ていた。

「譬えアンタがどれだけ悲しかろうと、やったことが変わる訳じゃない」

燕青はそう吐き捨てる。

「そうだ。貴方は殺した。殺し過ぎた。それに特異点を起こしてしまった以上、もう戦うしかない」

彼の主たる立香も従者と同じ気持ちであった。

盧俊義は力なく微笑する。

「敵対か。それで良い。私はこの為に特異点なんてものを生んだのだから。……ここまで来てしまったのだから」

盧俊義は構えを取った。

腰を低く落とし、両腕を不自然なまでに弛緩した肉体から一切の力が抜け落ちたような構えであった。

武芸者でない立香にも漠としながらも伝わる異様な緊張感。

魔星の第二位となったのも伊達ではないと感じさせるのには十分であった。

『気を付けてくれ。このサーヴァント、さつきからおかしな観測結果が出ている』

「おかしな結果？　ダ・ヴィンチちゃん、それってどういうこと？」

『このサーヴァントが現れた時、周囲の魔力や空間のゆらぎが全く観測されなかった。盧俊義は本当に突然出てきたんだ。それに加えてソイツが宋江を殺した時——ソイツの霊基は二つあった』

ダ・ヴィンチの齎した情報は、立香を困惑させるばかりだった。どういふことなのか全く分からない。

「直ぐに分かるさ」

ダ・ヴィンチの代弁をするかのように言葉を紡いだ盧俊義は立香の鼻先まで近づいていた。

大きく腕を振り被る。

放たれたのは、宋江を殺害したのと同じ貫手。

「どこまで見下げさせる、盧俊義——」

燕青は横合いからそれを蹴り払う。

「悪く思わないでくれ。愛しい人が、他の男にお熱になっていたらば嫉妬もするだろう？」

盧俊義は燕青の腰の辺りに蹴りを放つ。

予備動作のない脱力した動きからの音速にも達する蹴りである。

「だからといって貴様の狼藉を許す気はない」

対処の難しい攻撃を燕青はそれでもいなしながら、盧俊義の懐に潜り込み、肘をねじ込む。

「それは拳で示すものだッ！」

十面埋伏と言われる秘宗拳の体捌きを以て盧俊義は燕青の肘鉄を躲す。

秘宗拳——詰りは燕青拳の伝承に於いては開祖を燕青としながらも彼に拳法を伝えたのは主である盧俊義とされている。

無論、これは創作だ。流派に属する者達が、自分達の振るう拳に箔を付ける為に水滸伝という歴史として受け入れられていたかもしれない物語を利用したに過ぎない。

併し、こうしてサーヴァントとして現界している盧俊義はそういつた伝承を背負うだけの技巧があつた。

兎も角、拳技に於いてどちらが上というものは存在していなかつた。

燕青が拳を振るえば盧俊義がそれを捌き手刀を返す。

盧俊義が手刀を薙げば燕青は身を翻して、彼女の頭上に蹴りを落とす。

互いの力は拮抗し、全力を以てしてもそれが芯を捉える事はない。

乱打。乱打に次ぐ乱打。

二人の拳は星の輝きのように早く、二人の蹴りは自身の影すらも着いては来られない程だつた。

そんな二人の拳士の拮抗した戦いを先に破つたのは盧俊義であつた。

「なっ……」

燕青は驚愕を隠せない。

確実に躲していた筈の攻撃だつた。特に奇を衒っているわけでもない直線的な軌道の拳。それを横に上体を逸らして躲した。

だのに、拳が後頭部に当たつた。白打の軌道が歪んだというわけではない。盧俊義の腕は真つ直ぐ伸びた状態のままだ。

——どうなつてやがる!?

困惑しながら燕青は拳を交換する。だが、燕青の拳法は盧俊義が授けた物。彼女の教えの範疇にあつては燕青の拳が通ずる訳がない。

「どうしたその程度か、浪子」

「チッ！」

挑発と共に顎に向けられた盧俊義の蹴りを燕青は^{スウエーバック}上体逸らして避けようとする。

完璧に躲した筈であつた。

「グアッ……!」

併し、燕青の顎は搦ち上げられ、口腔から夥しい流血が起こる。

——糞ッ! 何がどうなつてやがる!?

何故、攻撃が当たってしまふのか、燕青にはその理屈が分からなかった。盧俊義の動きは見えている筈だった。盧俊義の次は読めている筈だった。

何か絡繰りがあるのは分かる。併し、その実像が全く掴めない。幾度繰り返してもそれは同じだ。

此方の白打は空を切り、彼方の拳が積み重なるばかり。

「燕青！ 宝具だ！」

鬪争を傍で見守っていた立香が思わず叫んだ。

状況はこちら側が不利である。それを覆すには鬼札に頼るしかない。

「よし来た！」

燕青も同じ考えだった。

若しかしたら力技に頼れば成るようになるかもしれない。そうでなくとも、天巧星が持つ最大の拳——知り難きを通したまま、凌ぎきれぬ是非もない。

「奥義装填！」

義侠の四肢に膨大な魔力が回る。

この宝具の理は、十面埋伏と言われる体捌きを自身の影さえも置き去りにする速度まで昇華することにある。その動きは宛ら、無数。

幾人もの義侠が拳撃を繰り成しているようにも錯覚するその奥義こそ——

「〃十面埋伏・無影の如く〃！」

闇の侠客、燕青の宝具である。

立香にとってすれば、尋常の戦闘に於ける燕青の動きすら目で追うのがやつとだ。

宝具発動下に於ける燕青の動きはそれこそ目に映らない。

燕青が消えたかと思いい次の瞬間彼が姿を現すと、拳打と襲撃の嵐が過ぎ去った後なのだ。

そして敵は倒れている。

「見事な体捌きだ。私には出来ない、君にしか許されない軌道だ」

併し、盧俊義はそうはならなかった。

「だが、ここに成立している私はこれでは倒せない」

それどころか、彼女は無傷で立っていた。

「なんで!？」

立香は目の前に在る事実を受け入れることが出来なかった。

燕青の宝具がまるで通じないとは全くの慮外であったのだ。

『そういうことか……』

ダ・ヴィンチは送られてきた映像を見て一人合点した。

燕青が確かに躲した筈の攻撃が当たり続けた理由も、天巧星最大の拳を凌ぎきつた理

屈も白日に晒されたのだ。

「だが、如何して貴方にそんなことが出来るんだ?！」

はつきりと体感した筈の燕青はそれでも疑問に思った。

何故なら、彼の知る輝く麒麟たる天罡星にはそれを成すだけのスキルや宝具になるだけの逸話は無い筈だった。

すると、盧俊義は口を開いた。

「——まだ私はこれの理由を話してなかったな」

自分の頭に生えた猫を思わせる耳を指しながら。

「私が一体何を混ぜられて此処に在るのか。今から見せるのが、私の真実だ」

そう言つて彼女は構えを変える。

上体を更に低く、左腕を前に突き出し、弓を引きように右手を後ろに添えた独特な構え。

「そして、これが君に捧げる私の愛だ」

一目で、立香は、マシユは、ダ・ヴィンチは、そして誰より燕青は確信する。

——盧俊義の宝具が来ると。

「奥義、装——填ッ！」

第四話 境界の猫

そも盧俊義とは男。

立香がするように認識するにはただ一つの哮りだけで十分であった。

己が高足たる燕青と同じ口上は、喉仏が壊裂するような力強い声で紡がれる。

「十面埋伏・夢幻の如く」

盧俊義自身が自らの体に起きた現象に記した名はそれであった。

「なっ!?!」

師の絶技の始動に、燕青は意図せぬ驚愕をする。

虎を思わせる前傾した走行で燕青に近づく盧俊義の後ろから、二人の盧俊義が飛び出してきたのだ。

その盧俊義には影があつた。管弦を得意とし耳の良さに自信のある燕青は、確かに心臓の鼓動を三つ聞き取っていた。

残像ではない。燕青と同じく歩法と体捌きを以ての見せかけではない。本当に盧俊義は分身しているのだ。

併し、驚愕に怯む時間は燕青には無かつた。三人の盧俊義が燕青の顔、腹部、足元に

それぞれ蹴撃を仕掛ける。

上段が左側、中断が右側から来る逃げ場のない攻撃。

これを躲すには、盧俊義の上を取るか後方に逃げるかの二つに一つ。

——咄嗟に燕青は後ろを選択した。背と地面を並行にして大きく飛ぶ。

併し、その選択肢は誤りだった。

「ガハッ!」

背中に鈍痛が走り、燕青は跳躍していた向きとは逆ベクトルの衝撃を受ける。

燕青が跳んだその先に盧俊義が現れたのだ。土から、湧き出てくるかのように。そして、燕青の背に自身の肩を激突させたのである。背中という部位も問題であるが、所謂カウンターの形で入ったこともあり、燕青は吐血した。

だが、攻撃はここで終わらない。衝撃で飛ばされた先に、最初に攻撃を仕掛けた三人の盧俊義が周り込み、燕青を蹴り上げる。

尤も、その高さは蹴り上げたというには聊かに過ぎていた。雲がすぐ傍までやって来て頬を撫でるようなともいうべき高さだ。

そして、そこから燕青が落ちてくるのを待つ程、魔星天罡を背負う悪漢は優しい人間ではなかった。

盧俊義は、他の三人の自分を踏み台にし、倒立した状態のまま飛び上がり、燕青を更

に天高く蹴り上げる。

瞬間、今までいた筈の盧俊義は全て消え、燕青が浮上したその先に盧俊義がいた。

「受け取れ燕青！」

伊達男と呼ばれた顔に盧俊義は容赦なく鉄拳を振るう。

秀眉が赤く染まった。

地に落ちていく燕青。そこに更に盧俊義は追撃を掛ける。

「これが私の——」

それも、まだ人の範疇にある筈の盧俊義という人物に在っては在り得ない方法で。

盧俊義の左腕が伸び、燕青の首を絞めたのだ。

そして燕青を掴んだまま引き寄せる形で腕はそのまま元の長さに戻り、

「愛だー！」

盧俊義は燕青の顔面に膝をねじ込ませたまま、地に墮ちた。

荒野に大穴が穿たれた。

それほどの衝撃が総て燕青の頭蓋に集中したのだ。幾らサーヴァントが人よりも遙かに頑丈に出来ていようとも、致命傷となり得る。

そしてそれを盧俊義は理解していた。

「ハハハハハハ！ 私の義侠かグシャグシャになった！ 引き潰れて、私の子宮に入っ

て来るよオ……フヒヒヒ！ フフフフフ！」

故に盧俊義は傲笑する。

立香は呆然と彼女を見つめるばかりであった。

「そうだ、これが私だ！ 私にあつたのはお前を教えたという記憶とお前を情欲の眼差して見ていたという過去だけだ！ あとは全部溶けた……否、成立した私は“私”をそのようにしか認めなかつた！」

『……君に混ぜられた幻霊の力を使って？』

問いはダ・ヴィンチから投げられた。

嘆息のような、嬌声のような短い応答の後に恋に狂った女として成立した英傑はカルデアの碩学を讃える。

「その通りだ。流石は万能の天才」

興が乗つたのか。

盧俊義は朗々綽々と自身の能力について語り始めた。

「私に混ぜられた幻霊は二つ。一つは“シユレディンガーの猫”」

それは量子力学に於ける思考実験の一つの名である。

この実験に於いて用意する物は四つ。

蓋付きの箱。一定時間の内に二分の一の確率で崩壊を起こす放射性原子。崩壊を検

知すると有毒ガスを発生させる装置。そして、生きた猫一匹。

さて、用意した箱の中に猫と原子とガス発生装置を入れ件の一定時間蓋を閉じ、その時間が過ぎるまでの間、猫はどうなっているだろうか？

開ければその猫は生きているか、死んでいるかのどちらかだ。併し、箱が閉じられていた間その猫は生きていても言え、死んでいるとも言える。

無論死と生の境界線が重なった奇妙な生命体が生まれるわけではない。生きた屍などと言った表現が存在するが言うまでもなく、そういった評され方をされる人間は生きている。死んだような目をしたと表現されるような男が仮にいたとしても、その男が生きているのならそれは生者の目である。

現実には、生きている状態と死んでいる状態が重なるなどということはありません。それは魔術的な視点で以てしても同様であり、生ける屍であろうと数字上は死んでいる魔神柱であろうと死を観測する魔眼はその「死」を捉えることが出来るのだから逆説的に生きている状態が確定されるわけである。

併し、量子力学——ミクロの視点で繰り広げられる世界では、暫し観測されるまで半々の確率でこうなるだろうということしか分からないから観測されるまではその半々の状態が保たれているとするケースが間々存在する。

そして、シュレディンガーの猫を用いて提唱者が訴えたかったことは、『死にながら

生きている猫がいらないのならば半々の確率が同時に存在していることなどありはしない』ということである。

併し、この曖昧な状態を否定する為に生まれた猫は皮肉にも幻霊化に辿りその性質は変容していた。

「この『シユレデインガーの猫』という幻霊が持つ性質は曖昧な境界線そのものであり、その能力とは曖昧な状態を確定するものであるのだ」

詰まる所『シユレデインガーの猫』は、提唱者であるエルヴィン・シユレデインガーが否定しなかった『机上に於いてのみ成り立っていて現実には適応し難い曖昧さ』そのものとして成立してしまっただのだ。

「故に私はどこにでも現れることが出来るし、『存在しない』という状態を『存在したまま』行うことが出来る。零人であれば、沢山でもある。手足がないと思いきや無数に増える時もある。男であれば女でもある」

誰にも気が付かれず、どの装置にも検知されずカルデアに転移出来たのは、盧俊義がどこにもいてどこにもいない存在だったからだ。

燕青の白打を全て凌いだのは、曖昧さを利用して腕を生やしていなしていたからだ。

盧俊義の宝具も、自身の数量を曖昧にし分身を行うことで成り立つ絶技である。

また、元々実在しない存在として曖昧である盧俊義は、曖昧を確定することが出来る

シユレディンガ―の猫によって定義し直すことが出来たのだ。

何故、燕青を愛する女として在りたかつたかは、盧俊義自身最早定かではない。否、そうなるうとした理由にすら頓着していない。

—我思う、故に我在り（コギト・エルゴスム）——である。

「——言っておくが、この耳は私が意図したものではないぞ。どうも猫というイメージに引つ張られてしまったことが原因らしい」

耳の理由についても話す言つた自身がした約束を盧俊義は律儀に果たす。

『矢張りそれだったか』

「だが、万能の天才よ。それだけでは私を言い表すのに不十分なのだ。盧俊義がこうして形作られるに当たつて、シユレディンガ―の猫だけでは出力が足りなかつた。だからもう一つ幻霊を混ぜる必要があつたのだ」

『それについても説明してくれるのかい？ 義侠殿』

その呼び方が余程可笑しかったのか、盧俊義は嘖き出した。

「良き世界を作ると言つてそれを信じた者達を裏切り殺すような者に在る“義”など笑止でしかないと思うがね。併し、そう呼ばれた以上は答えるしかないだろう。尤も元より、隠すつもりなどなかつたが」

「それは如何して？」

「死に逝く者が、自分を殺した者のことを知ることなく死ぬのは無念でしかないだろう？」

冗談などではなく、盧俊義は至って真剣な表情で立香の問いにそう答えた。

「何を意外そうな顔をしている、藤丸立香。君の役割とは私に燕青を運んでくることがだけだった。そして、私の中に燕青は既に戻った。ならば、お前に用はない。用がないならば生きていても仕方がない。ほら、当然の道理だろう？」

気軽な調子での殺害宣言であつた。

「話が逸れたな。興が乗ると余分な話を話し過ぎる。私の悪い癖だ。何事も先送りにするのは良くないのに。死期であるのならば尚更だ」

盧俊義は困つたような顔をして、首をゆっくりと振つた。

「もう一つ私に混ぜられたものは、日本のとある物書きが生んだ精神科医。登場する物語自体が、というのもあるが、その医師というのも死んでいるのか生きているのか曖昧な境界にあつた。故にだ、丁度良かったのだ。曖昧さを必要以上に味付けせず、そのままに補強するには」

——曖昧であることを確定させるといふのは、なんて矛盾した話なんだろう。

淡々と語られる盧俊義の発生経緯に対し、立香はぼんやりとそのような感想を抱いた。

「さて、これで君に話すべきことは話した。そろそろ幕引きとしようか」

愈々盧俊義は、立香に手を掛けようとする。

屹度、慄くだろう。盧俊義はそんな想像をしていた。

だが――。

「何が可笑しい?」

意外、藤丸立香は酷く悲しそうな顔をしていた。

気を違えたというわけではなく、素面の儘に。

「アナタは燕青のことを愛しく思っている筈なのに、燕青のことは何一つ見えていないんだなと思って」

立香が抱いたその感情に敢えて名前を付けるのならば――それは「憐憫」だろう。

「何故、そんな顔をする?」

「悲しくなるからです。見えていない相手を手をそれでも思い続けるアナタのことを思うと。そういう在り方を選んでしまったアナタを思うと」

「……君は優しいのだな。だが、何を以て私の目に燕青が映っていないと言う? その根拠は何だ?」

立香は目を閉じた。

そして、直ぐに開けるとその顔から悲しみは消えていた。

代わりに顔に現れていたのは、何と形容することも出来ない強い思い——。
「俺の知ってる燕青は、こんな所で倒れたりはしない！」

それは自身のサーヴァントに対する絶対の信頼であった。
根拠としてはあまりにも薄弱だ。

だのに、三絶と謳われた勇士は胸のざわめきを止めることが出来なかった。
ゆっくりと後ろを振り返る。

「なっ——」

絶句した。

確実に倒した筈の燕青が立っていたのだ。

それを認識した頃にはもう遅い。

光輝く義侠の拳が、盧俊義の胸を貫いていた。

「——ッ！ 如何して……」

盧俊義は自分の口元に湿り気を感じる。

臓腑の一つか二つ、潰れたのだろうと冷静に考えた。

その疑問の回答として、立香は自分の右手の甲を見せた。

「令呪を三つ使った。これでアナタの宝具に耐えたんだ」

魔力の塊である令呪は一度に複数使うことも可能である。

三つ合わせた場合の魔力総量は、サーヴァントの存在を固定させる霊核の損傷を瞬時に補修することすらも可能とする。

確かに致命傷を負った筈の燕青がこうしてこの場にいるのはそういった経緯であった。

「……おかしい。手ごたえはあった。この身に燕青を編む魔力が入って来るのも感じた。他に強い魔力も感じなかった」

『その理由は、多分、貴女自身が話したことの中にあると思います』

その疑問に答えたのはマッシュであった。

「……キリエライト」

『貴女の能力は“自分の曖昧さ”を“望んだ形に固定する”もの。なら、欲した結末を望む気持ちが強すぎればそれを自分の中に作り出してしまいかもしれない』

「私が私自身を騙した？」

意図せず乾いた笑声が出てくるのが、盧俊義には愉快で、それでいて不愉快で堪らなかった。

「だが、分からない。令呪を使った時点では燕青も藤丸立香も、私の力について何も知らなかった筈だ。如何してこんな方策が取れた？」

「そういうのじゃないんだ」

策という言葉を燕青は否定する。

「マスターは、何とかなるとしか思つてなかつたんだ。後も先も、考えず」

盧俊義はポカんと口を開き、虚空を見つめた。

理解し難いことだった。

そして、同時に思つた。

藤丸立香は燕青を信頼していたのだと。燕青がいれば、燕青になれば何とか出来るだろうと。

「私に、足りなかつたものだ」

手繰るのは胡乱な境界に埋没した自身の——サーヴァントではない盧俊義の記憶。

創作物に過ぎない英雄が持たない筈のものの中で、盧俊義は幾度となく燕青を信頼しなかつた。彼の言葉に耳を傾けず、その行動を否定し続けた。

自分に向ける思いを裏切り続けた。

——痛みだ。盧俊義にとつては認識したくない痛覚であつた。

故に盧俊義はそこから逃げ出したいくて仕方がなかつたのだ。

そんな彼の耳に届いたのは一篇の詩であつた。

「胎児よ、胎児よ。何故躍る？ 母親の心が分かつて恐ろしいのか？」

スカラカチャカポコと奇妙な響きと共に聞こえてきたその詩に盧俊義は身をゆだね

てしまったのだ。

「私の負け——か」

その一言はふと凧いだ風の中に消えた。

泡沫のように大気に溶けていった盧俊義の肉体と共に。
足元には黄金に輝く杯が落ちていた。

第五話 千山万水語るに及ばず

「これ、聖杯？」

「……みただいな」

杯を拾い上げる燕青の顔はどこかやるせなさを感じさせていた。

『やったことの規模が規模だけに魔力は殆ど残っていないみたいだね』

ダ・ヴィンチは聖杯についてそう鑑定した。

百八魔星を疑似的に作り出したこともさることながら、小規模ながらも天体を創造してしまつたことが大きかつた。

何しろ神代の事象の再現である。権能或いは大権能とも呼ばれる太古の神々のみが持ちえた力が大いに関わる現象に費やす魔力の量は万能の願望器を一つ程度ならばいとも容易く食い潰すだろう。

『まあ、万能の願望器でないものと言えど聖杯を取り戻せたことには間違いはない。これでこの特異点も修復される筈だ』

「その通り。これで君たちは無事にカルデアまで帰るだけだ」

瞬間、この場にいた誰もが呼吸すらを忘れた。

ダ・ヴィンチに応答したのはこの場にはいけない筈の人物であったから。頸椎が砕けるような凄まじい速さで、立香と燕青はその声の在処に振り向く。

「盧俊義ッ！」

倒した筈の特異点の元凶たる人物がそこに立っていたのだ。

『そんな如何して?!』

「依違な夢幻の住人たる私だ。死んだか生きてかさきえどつち付かずに決まっている」

曖昧さを力として振るう盧俊義は、自分の生き死にすらも虚実の境界線に乗せ、そして無理矢理自分がまだ「生きている」と解釈し、肉体を再構成したのである。

事実としては受け入れ難いことだろう。現にマシユもそうであった。

だが、そんな彼女を盧俊義はより深い迷夢に陥れる。

「所で少女よ。君は美しい声をしているな。顔は分からないが屹度美人だろう。名前を教えてくださいないだろうか？」

『え？ 何を言つて……』

マシユの声には困惑の色が見え隠れしていた。

無理もない。気障ったらしい言い回しではあるが、盧俊義は至つて真剣にそう言つて
いるのだ。

畢竟するに、此処にいる盧俊義の認識は、『マシユのことは今初めて知った』なのである。

「一体何がどうなつてやがる!？」

燕青も、立香もまたマシユと同じく戸惑いを隠せない。

フムと一呼吸置くとダ・ヴィンチは手元のキーボードを操作し、盧俊義の霊基を解析した。

『——なんだ、コレ。心電図じゃないんだぞ? なんでこんなに数字が上下するんだよ?』

モニターに表示された現実常識を超越している筈の万能の天才を以てしても俄かには信じられないことであつた。

盧俊義のステータス、属性などのデータが絶えず変化し続けていたのだ。

ステータスや属性を変化させるスキルや宝具を保有するサーヴァントはカルデアにもいないことはない。例えばエルキドゥは「変容」のスキルを以てステータスを自由に振り分けることが可能であるし、秩序・善の属性を持つヘンリー・ジキルは宝具を使い混沌・悪の属性を持つハイドになる。

だが、それらの前例があつたとしても一秒として同じ状態である時が存在しない今の盧俊義は異常と言わざるを得なかつた。

「……シユレディングアの猫の力を使えば使うほど、盧俊義自身も曖昧になっていく？」
ふと思いついたように呟いた所に、それだと、ダ・ヴィンチは叫んだ。

『カルデアへのレイシフト、いかなる装置にも引つかからない認識遮断能力、完全消滅からの霊基再構成——幻霊とはいえあまりにも大きな力には変わりはない。そして盧俊義という幻霊はその大きな力にへばりついていてだけの存在なのだから、当然それに呑み込まれるってこともあり得る。ついさつきまでは大丈夫だったみたいが、無からの再生は魔法域の奇跡だ。症状が発露するトリガーになってもおかしくはないだろう』

——実際はそうではない。

これは盧俊義の中にさえ消えてしまった事実ではあるが、きっかけは自分が定義した
在り方を自身で否定してしまった所為で、
“盧俊義”という概念の強度が薄弱になって
しまった為だ。

彼女は燕青を孕む母という在り方に依存し、目を逸らしたかった己の罪悪に向き合う
ことを選んだのだ。

「——盧先生」

無論、燕青は知りもしないことではあるが、それでも嘗て親愛した師であり主であつた人の痛ましい姿は感じ入るものがあつた。

「ダ・ヴィンチの姐さんよオ。仮にこのまま盧俊義がシユレディングアとやらの力を使

「続けるとうとうなる?」

『可能性ではないが、恐らく消える。『盧俊義』と呼ばれた幻霊すらなかったことになるかもしれない』

「自分は今どんな顔をしているのだろうか、燕青がふと思うには十分な仮想であった。」

「聞いたか、盧俊義。せつかく生まれただ何も消えちまうこたあねえだろ。大人しくしている。これ以上アంతタが戦う意味はねえんだ」

「何を言う燕青。元より『盧俊義』など無いものだ。そこに在る意味も無い。消えることに恐怖などある筈もないだろう」

盧俊義の言葉に、立香は物悲し気に俯いた。

「——戦う意味はある。言っただろう? 散り逝く者が葬る者のことを知らぬことは無念だと」

「何を言っている!?! 貴方が、この燕青を知らぬわけがないだろう!?!」

「いいや知らないねえ。私が知っているのはあくまでも私が知っている『燕青』だ。此処にサーヴァントとして藤丸立香の下にある燕青を私はまだ総て知った訳じゃあない!」

「『ドツペルゲンガー』のことか?」

燕青は自身に混ぜられた幻霊の能力のことを言わんとしていると思つた。

だが、盧俊義は首を横に振つた。

「違うね。お前の力はそんな所がない。私が見せて欲しい力とは、即ち藤丸立香と紡いだ絆のことだ。今のお前にとって最も強い力のことだ」

燕青はその言葉に怒りを露わにした。

「俺が、主を信頼していないと言っているのか？」

「そう言っている。自身を失うかもしれない力を使わないのはそういうことだろう？」

確信を以て盧俊義は言つた。

「藤丸立香の声は君にとつてその程度の物か？ お前を燕青と呼ぶ声があればお前は燕青であると思わんのか？ お前の主は十全にお前を信頼したぞ。ならば十全の信頼を返せよ」

顔を覆い、燕青は乾いた笑声を上げた。

「燕青？」

その様子を心配し、立香は彼の名を呼んだ。

「いや、大丈夫だ、マスター。当たり前のことを、意外なヤツに指摘されたのが可笑しくつてたまらないっただけだ」

「当たり前のこと？」

「俺が俺を失った新宿の時と今の俺の違いさ。アンタがいるかないか。大きな違いだった」

立香は大きく目を見開いた。

「何、意外そうな顔してるんだよ。大きいぜ、主の存在は」

義侠は笑顔を見せて、自身のマスターに背中を預けた。

「俺は藤丸立香の声がある限り、もう俺を見失わない。証明してやる。拳を構えろ。掛って来い盧俊義。見せてやるよ。カルデアがサーヴァント、燕青の全身全霊ってヤツをよオ！」

その啖呵に、盧俊義は呵々大笑する。

「良いねエ！ それでこそ浪子と言われるだけの好漢だ！」

オオと雄叫びを上げ乍ら、盧俊義は燕青に突っ込んでいく。

「食らえ！」

ただ真つ直ぐ向かってくる盧俊義に、燕青は大きく距離を取りながら短刀を手に作り出してそれを投げつける。

数本投げつけた短刀は全て盧俊義の体に突き刺さる。

すると、彼女の体は大きくよろめき、同時に吐血した。

『これは、静謐のハサンさんの毒の刃です！』

「自分の姿を保ったまま能力だけを再現した!?!」

マシユの分析に、立香も流石に驚嘆を表す。

「この程度で、麒麟たる私が止まるかア!」

併し、盧俊義は体制を持ち直し、尚も疾駆し続ける。

「ならこれはどうだ!?!」

今度は燕青の手に横笛が現れる。

そしてそれを吹き鳴らすと、またも盧俊義の体勢が崩れる。

『これはオルフェウスに由来する音魔術だ!』

今度はアマデウスの能力だった。

併し、稀代の音楽家の力ですらも盧俊義は止まらない。

「舐めるなア!」

自らの腹に手刀を突き立て、痛みで以て微睡を掻き消し乍ら、盧俊義は燕青に向かい続ける。

盧俊義の意志に舌を巻きながらも、燕青は次の手を考える。

元より燕青は、徒手空拳以上に弩を用いた戦いを得意とするアーチャーである。ならば彼の全霊が弓矢にあるのは当然のことだ。

手に持つ武具は弓。そして振るべき力は――

「森の恵みよ！ 魔星を滅ぼす毒となれ！」

エイワズ
櫛が内包する毒素である。

その毒は毒を火薬として爆発させる力がある。

静謐のハサンの毒の刃に蝕まれている盧俊義には最も強力な武器となる。

魔星天罡の肉体は木つ端微塵に砕けた。

「成程、これが燕青か」

塵に還った筈の盧俊義はまたも肉体を再構成し、遂に疾走を止めた。

「良いものを見せて貰った。有難う。満足のいく敗北だ」

「じゃあなんで戻って来たよ？」

毒を吐く燕青に盧俊義は苦笑した。

「後始末が残っているからさ。何、安心したまえ。それが済んだら、私は無に還るさ」

ズキリと、立香は自分の胸が痛むのを感じる。

「そんなこと言わないで下さい」

気が付けばそんな言葉が口に出ていた。

「無かった筈のものだからってそこに在ったんだ。簡単に消えるなんて言わないで下さ

い」

思い出されるのは一人の男の顔だ。

総てを背負つて、たった一人で消えていった、優しいただの人間の気の抜けた様な笑顔だ。

彼もまた本来は在らざる者だった。

人間性の無かつた王が、人間性を望んだ結果生まれた、無かつた筈のものだ。

それを無意味だったと言うことなど、消えるのが当たり前だと思うことなど藤丸立香に出来る筈もない。

「——私は多くを殺めたのだぞ？」

「それを悪いと思うなら尚のこと消えちや駄目だ。失つたものは他の何かを差し出して戻つて来るものじゃないんだ。消えることには何の意味も無い。それは、アナタのエゴだ」

その言葉に、盧俊義は力無く笑つた。

「優しいと言つたが君は残酷だなあ。残酷で優しいよ、藤イ丸ウ立香ア」

藤丸立香の本質を知つて盧俊義は

「燕青」

と自分の弟子に語り掛ける。

「彼の優しさと残酷さは屹度、いつか彼自身を突き刺す刃となるだろう。師からの——元主からの忠告だ。その時が来たら君は支えてやれ。彼を主だと思ふのなら。それを

「今後も貫くのならば」

「語るに及ばず。それが千山万水を踏み越えるような道であろうと」

燕青の啖呵に、盧俊義は穏やかな顔をしていた。

まるで総てに安堵しきつたかのように。

「……帰ろうか、カルデアに」

「ああ」

遂に二人は荒寥たる魔星大陸から退去した。

「若し縁があつたらまた会おう」

消えると言つて憚らなかつた筈の英傑の次を望む言葉を聞きながら。

エピローグ and トレーラー

灰色の大地に一人、盧俊義は空を見上げた。

「藤丸立香……か。厄介なモノを残したものだ」

彼の言葉は盧俊義の中に恐怖を植え付けた。

消えることに対する恐怖を。

意識のあるものは須らく、死の恐怖というものが存在する。群としての生命体を存続していく上では非常に重大な要素である。

そして、この死の恐怖は長い時間を生きるほどに肥大化していく。

此れを前提に置けば、盧俊義に死の恐怖が薄いのも当たり前であった。

何しろ発生してからそれほどの時間が立っていない。

——抱かなくても良い筈の感情であったのに。

「“また” 会おうなどと口に出てしまったなあ」

次への希望は、逆説的に終わることに対する恐怖だ。

盧俊義は震えていた。疾うに薄れてしまっている “盧俊義” の最期は溺死であった。

それも記録にしか過ぎず、その時どんな感情であったかなど想像は出来ても所詮は想像

だ。

死に対する恐怖は盧俊義にとっては初めての感情だった。正直あまり良い物ではないというのが感想だった。

「知りたくは、無かつたなあ……」

だが、そうは言つても審判の時はやつて来る。

後始末を済ませれば、盧俊義は消えるか、それとも座に上げられるかが決する。

「——出て来てくれ、いるのだろうか？」

先送りにしても良いことは無いと、盧俊義は自らの運命に呼び掛けた。

——荒野の彼方からそれは歩いてやつて来た。

弁柄色の武骨な鎧を纏つた男だった。無造作に伸ばされた血のように赤い髪、この世にこれほど白いものはないと錯覚してしまうほど白い肌をしている。

そしてそれ以上に目を惹いたのは、彼の双眸であった。患つてでもいるかのうに瞳孔が白く濁つていて、その癖、見つめられていると鍬を向けられているかのような威圧感を感じる。

ともあれ、圧倒的な存在感を持つ異様な男であった。

「終わつたか、燕雀？」

現れるなり盧俊義に問いを投げかけた男はあまりにも無礼であった。

燕雀——大したことがない者——という呼び方からしても、男の尊大さが窺えた。それでも盧俊義は笑っていたが。

「ええ、終わりました。私の負けで御座います」

「そうか。ならば寄越せ。そういう契約だった筈だ」

盧俊義の戦いには何も興味がないのか、男は手を差し出した。

「その前に一つ、頼みがあります」

「頼み？」

「ええ。本来は私で解決したいことではありませんが、何分私にはその力はない。否、天地を探しても屹度これを成せるのは、貴方を含めて極一握りでしょう」

そう言つて盧俊義は、空を指した。

「太陽を九つ落して欲しいのです」

後始末とはこれのことだった。

中原全土を地獄に変えた、己が生み出した太陽を消し去ること。

「嫦娥以外が俺に命ずるな——と言いてエ所だが。良いさ。お前が応と言わなければ俺の望むものは手に入らねエ。やってやろう」

億劫そうに首を鳴らすと、男は魔力を編み、弓を形成した。

瘦躯乍らも長身な男の丈にも匹敵する真紅の大弓であった。

更に男は一本、白い矢を作り出すと紅弓に番え、天に向かって放った。

矢は、流星が逆さまに落ちてくるかのようになり、蒼穹を飛翔する。

まるで空の青に呑み込まれたかのように矢はどんどんと小さくなつていき——そう思つた時には太陽は一つになつていた。

「たつた一射で九つの太陽を落とすとは……伝承以上の手前。御見事」

「当然だ。俺が落とした陽は天蓋よりも上にあつたのだ。ならば一射で落して当然だろうよ」

盧俊義は言葉を失う。

男は英霊だった。それも凡百の英霊とは違う。

神代に生きた中華きつての神秘殺しにして、日を穿つ勇士。人類史に名を残す弓兵の中でも屈指の存在である。

彼は特異点成立に当たつて盧俊義に呼び出されたサーヴァントであつた。

何のためかは言うまでもない。特異点を引き起こすに当たつて避けられない現象である世界によるサーヴァントの召喚に因る邪魔立てを防ぐためだ。

実際、この十二世紀の中国にあつても野良サーヴァントは発生し、関羽、白起、岳飛、光武帝など中国史に於いても指折りの英雄たちも召喚された。

——その悉くをこの英雄は一人で討ち取つたのだ。

では何故、英雄は盧俊義に従ったのか。

「ともあれ、これで後始末は終えることが出来た。……約束の品です」

無論、聖杯に因って呼び出されたサーヴァントの目的は一つしかない。

聖杯である。

シユレディンガーの猫の能力を使い、盧俊義はもう一つ聖杯を隠し持っていたのである。

「これだ。これを求めていた」

自信に対する讃辞にも眉一つ動かさなかつた英雄だったが、聖杯を手にすると、顔を悦に満たした。

「興味本意ではあるが、一つ訊ねたい」

「何だ？」

そんな彼に盧俊義は問い掛ける。

「聖杯の多くは万能の願望器とは名ばかりの魔力塊に過ぎない。それも例に漏れず。一体何に使うつもりか？」

「『燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや』——小鳥に過ぎない手前エに、鴻鵠たるこの俺を理解することが出来るか？ 言った所で」

英雄は嘲るような口調で答える。

「逆に聞くがよ、お前は如何して俺に陽を落させた？ 意味は無かつただろう？ お前が負けた時点で、あれは無かつたことになるものじゃねえか、なあ？」

「気持ちの問題で御座いますよ」

「ハッ！ 矢張り分からんなア。燕雀の考えることというのは。それと同じように鴻鵠たる俺のこともお前は分からんだろう」

盧俊義は苦笑交じりに同意した。

——その通りだ。小物に過ぎない私が真なる英雄を理解しようなどとはおこがましい。

——それにこれは私が知らなくても良いことだ。この方は私に最期を届けたあの男ではないのだから。

そう思いながら、愈々彼女は思い残すことがなくなつたのか、肉体が蛍のような光の粒になつて散り散りになつていく。

「どのようなことになるかは分かりませんが、幸多からんことを。偉大なる后羿よ」
そう言い残して、盧俊義は消えた。

一人残された男は天に昇つていく灯を見つめた。

そして、

「キイハハハハハハハハハハッ！」

腹を抱え哄笑する。

英霊の名は后羿。

特異点に生まれた十の太陽の伝説の元になった逸話を持つ英霊である。

中原を脅かす怪物を多く葬り、その射で以て星を穿つ、中華最大級の勇士。

人々の為に戦った英雄だから屹度、持つ願いは清らかなものであるうと、盧俊義は思い込んでいた。

先入観である。畢竟するに盧俊義は后羿という英霊を完全に見誤った。

「嗚呼、腹が痛エ。ここまで簡単に聖杯が手に入るとは思っていなかった。あんまりに易いものだから、ツボに入っちまった」

聖杯に懸ける願いに思い至りもしなかった。

「兎に角、俺が、この羿が聖杯を手にした。ならば、これより始まる」

この英雄の持つ願いは人類にとっても最も分かりやすく、そして最も悪しき願いである。

「滅びが！」

それは——世界の終わり。

続く